

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2022年10月20日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第7回仙台国際音楽コンクール最高位受賞記念

チェ・ヒョンロク ピアノリサイタル【東京公演】演奏評

梅津 時比古 (音楽評論家)



©T.Tairadate

ピアノとヴァイオリンの両部門を持つ仙台国際音楽コンクールは、世界のコンクールの中でも独自の地位を占めている。コンチェルトを中心にしているからである。セミファイナル以降、審査はコンチェルトのみによって行われ、出場者は数日の内に三曲のコンチェルトを弾かなければならない。この構造を維持するに際しては、地元のオーケストラである仙台フィルハーモニー管弦楽団の支えが大きい。

予選は独奏曲によって行われるとはいえ、審査委員も、聴衆も、出場者の一人一人をコンチェルトによって記憶しているであろう。

2019年に行われた第7回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門の第1位、チェ・ヒョンロクを受賞記念リサイタルがコロナ禍によって延期され、2022年9月9日に東京の浜離宮朝日ホールで、同11日に日立システムズホール仙台で行われた。

東京公演はラヴェル《亡き王女のためのパヴァーヌ》から始められた。

プログラムを事前に見ていたにもかかわらず、1曲目の音が客席に届いたとき、新鮮な思いに包まれた。不意を打たれたと言ってもいい。通常、アンコール・ピースとして弾かれることが多いこの曲を劈頭(へきとう)に持ってきたことによる驚きだけではない。また、コンチェルトのイメージで刻印されていた彼の、思いも掛けぬ小品を聴いたことによってもたらされたものでもない。冒頭から、彼の音の全体が新鮮に息づき、そこにコンクール時からの極めて大きな成長を実感したからである。

繊細な柔らかい響きの中に、パヴァーヌの旋律線が温かみを具えた太さで浮かび上がる。ヒョンロクのコまやかな感受性が決して小綺麗な位相にとどまらず、全体を構造的に捉えることによって、いわば小品からの脱出が図られている。

続いて同じラヴェルの《夜のガスパール》。考えるまでもなく、このつながりは極めて自然に移行する。第1曲《オンディーヌ》。ここではヒョンロクは《亡き王女のためのパヴァーヌ》から一転して鮮やかな切れ味のテクニックを見せ、高音の連続が、まさに波のようにきらめき、ただよう。その流れの中で半音階になる一瞬は、テンポを落とし、通常隠れがちな半音階の官能的な魅力を全開させた。

第2曲《絞首台》では、過度に表現主義的な解釈は取らない。たとえば、打ち続く変音を意図的に響かせて強迫観念のように表現するのではなく、むしろ響きを定まらせずに、絞首台にぶらさがる縄が風に寂しくゆらめいている情景を醸し出す。

第3曲《スカルボ》は超高速で駆け抜ける。しかし一瞬の間にラヴェルのスピートの指示も正確に守り、難しい音型も決して崩れることなく、はっきりと聞こえる。思わぬ音も面白く拾い、跳躍して走り回る小悪魔スカルボの背景が立体的に映し出される。曲の深淵を表出し得た。

休憩後はショパン《24の前奏曲》の世界だけで独立させる。フレーズの頭に絶妙な間を置き、ためてから歌う。そのフレーズが音楽的に自然に訴えてくるのは、全体を俯瞰する視点が確立されているからであろう。淡々と前へ進むなかに、繊細さだけではなく、厳しさが生まれている。

プログラム冒頭のラヴェルで、不意を打たれた新鮮な驚きのひとつの要素がここで明確になった。それは、レガートの美しさである。2019年に聴いたときにはコンチェルトでもあり、モーツァルトの協奏曲(ト長調K453)などではやや生硬な流れが感じられた記憶がある。この《前奏曲》では、レガートの滑らかな響きによって、音の表情が豊かになり、それが、緻密な音楽を生み出すことにつながっていた。

チェ・ヒョンロク ピアノリサイタル【東京公演】

日時: 2022年9月9日(金) 19:00開演

会場: 浜離宮朝日ホール

演奏曲目: ラヴェル: 亡き王女のためのパヴァーヌ

ラヴェル: 夜のガスパール

ショパン: 24の前奏曲集 op.28

(アンコール)

サン=サーンス(ゴドフスキー編曲): 白鳥

ショパン: ワルツ第7番 嬰ハ短調 op.64-2

第7回仙台国際音楽コンクール最高位受賞記念

シャノン・リー ヴァイオリンリサイタル【東京公演】演奏評 片桐 卓也(音楽ライター)



©T.Tairadate

多様な歴史的視点と演奏の可能性を感じさせる
充実のリサイタル

2019年に開催された第7回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門で最高位(第2位)を獲得したシャノン・リーの受賞記念リサイタルが9月21日、浜離宮朝日ホール(東京都)で開催された。新型コロナウイルスの流行によって何度か延期され、コンクールからは3年の月日が流れた訳だが、その間のシャノン・リーの研鑽、そして成長を実感させてくれるコンサートだった。

まず、プログラミングが非常にバランスの取れたものだと感じた。最後に置かれたブラームスの「ヴァイオリン・ソナタ 第2番」に向けて、最初にまずバルトークと武満徹、前半は続いてエルンストとリスト、後半はイザイの「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第5番」とブラームスという組み合わせ。まず20世紀の前半と後半の作品、それらかなり対照的な作品を並べ、その後に楽器のヴィルトゥオジティ(名技性)を追究した2つの編曲作品を並べるという歴史的な視点がそこにはある。同時にヴァイオリンの楽器としての可能性の広さも感じさせてくれる楽しいプログラミングである。そして、それは後半のイザイとブラームスの対比の中にも活かされて来る。ピアノとの共演だけでなく、無伴奏作品を入れているという点も、彼女の表現の幅広さを現すものであった。

リーの演奏するバルトークに関しては、コンクール時に「ヴァイオリン協奏曲 第2番」の演奏を聴くことが出来たが、ソナタの実演に接するのは初めてで興味深かった。協奏曲の時でも楽譜の読みの正確さと、それを表現する意欲が印象に残ったが、今回の「ヴァイオリン・ソナタ 第2番」でも、バルトークの音楽に感じられる斬新さが、単に作曲家の思いつきではなく、音楽語法として非常に練られたものであることを教えてくれた。続く武満徹の「妖精の距離」でも、それは同じであった。バルトークの激しさとは逆に、静謐な、透明な感情に満ちた作品であるが、様々な音色のひとつひとつに意味を感じさせてくれる。もしかすると、カーティス音楽院で師事したアイダ・カヴァフィアン(武満徹の室内楽作品など数々を初

演したタッシのメンバーであった)の「薫陶」もあったのかもしれないけれど、武満への深い共感が感じられる演奏だった。

エルンストの「シューベルトの『魔王』による大奇想曲」(ヴァイオリン独奏)は時にアンコール・ピースとして取り上げられることもあるが、技術的難曲のひとつである。しかし、その難しさを感じさせることなく、ロマン派的な名技性の世界に到達しようとした作品の魅力を感じさせる演奏だ。そしてミルシュタインが編曲したリスト「コンソレーション 第3番」もまたロマンの香り高い編曲であり、それを素直に感じさせてくれた。それらのコンビネーションが後半のイザイ、ブラームス作品のイメージに重なって来る。

イザイの「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第5番」は作曲家の弟子であったクリックボームに捧げられた無伴奏曲であるが、武満を先取りしたような静けさと音色感を持ち、前半のプログラムと後半のプログラムをつなぐような役割を持っていた。そしてロマン派のなかでも傑出したヴァイオリン・ソナタを書いたブラームスの作品の中から選ばれた「第2番 イ長調」は、伸び伸びとしたシャノンの演奏によって、ブラームスの充実した音楽的な時間をあらためて感じさせてくれた。

どの作品にも彼女らしい姿勢が感じられる演奏で、幅広い時代と演奏スタイルへの関心も感じさせてくれた。同時にジェシカ・オズボーンのピアノも、シャノンの意図に寄り添って、非常に密度の高い音楽を奏でていた。全体として高度なテクニックを必要とする作品が多かったが、それを意識させることなく、あくまでも音楽の魅力を伝えようとする意図がシャノンの演奏のなかに感じられた事がとても嬉しかった。コンクールでは協奏曲を中心に演奏し、それが評価された訳だが、それ以外の作品での彼女の可能性もはっきりと教えてくれるコンサートであった。今後も、協奏曲だけでなく、リサイタルでも彼女の演奏に接したいと思った。

シャノン・リー ヴァイオリンリサイタル【東京公演】

日時: 2022年9月21日(水) 19:00開演

会場: 浜離宮朝日ホール

演奏曲目: バルトーク: ヴァイオリン・ソナタ 第2番 Sz76

武満 徹: 妖精の距離

エルンスト: シューベルトの「魔王」による大奇想曲 op.26

リスト(ミルシュタイン編曲): コンソレーション(慰め)

第3番 変二長調 S172-3

イザイ: 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第5番 長調 op.27-5

ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 op.100

(アンコール)

リリ・プーランジェ: ノクターン